

國語政策に見る地球一極主義と傳統

いちかは ひろし
市川 浩

昭和二十一年十一月米國教育使節團勸告を基調とせる「國語改革」MOJIBHI STOPSは「現代かなづかい」及び「當用漢字」の内閣告示として發進す。爾來今日まで七十三年の間、様々の缺陷、特に僅々十三日前に發効せる日本國憲法正本の表記に従はざるのみならず、同第二十一條保證の表現の自由にさへ制限の及ぶに至らむとす。世に理ありと雖も用ゐられざるは常の事なれど、指摘、批判の聲最近殆どなきは異常にあらずや。以下に我が思考の一端を紹介せむ。

十八〜十九世紀にかけて自然科学の發展は人類史上例を見ざる快擧と言ふべく、その普遍的成果は人間の思考に多大の影響を及ぼしたり。即ち普遍的結論をこそ追求すべけれど、「科學的」の一句特に尊重せらる。然るにこの語の示す苛烈なる要求は最初の前提より發して論理的に辿り著きたる結論に、一つなりとも矛盾する事實あらば、その前提は即無効とす。然れば事人文に關する考察には、全人類に共通の前提を求むるを要し、この探求の結果人類のあるべき姿を均一化せむとする地球一極主義グローバルイズムの誕生を見る。その最初の成功は近代オリソピックにして、明治二十九年¹⁸⁹⁶歐洲、南北米州、アフリカ、アジア、オセアニアの五大陸連帶を謳ひ、競技は共通の規約ルレの許に行ひて大いなる成果を得たり。

この成功を契機として最終的に世界統一を目指す地球一極主義への關心高まり、其の一つとして、世界人類共通の言語を用ゐば完全なる意思疏通實現し、世界に平和訪るべしの論起る。これに觸發せられたるにや、我が國文部省は早くも明治三十五年¹⁹⁰²國語調査委員會を設置し、その調査目的四項目の第一に「文字は音韻文字フォノグラムを採用することゝし、假名羅馬字等の得失を調査する」と明記し、既に漢字廢止は決定済の國策として戦後の國語改革に引繼がれけり。特に敗戦による我が國固有文化否定の潮流も勢を増し、特に日本語は敗戦國の言語なれば、世界語の候補たり得ざれば、往時全盛の米ソ孰れかの表記への早期變換 possible の道として、ローマ字化容認の潜在意識定著す。更に茲數年に亙る論を聞くに、英語教育は須く「聞く、話す、書く、讀む」の四要素を重點に學ぶべしとして、小學校に於ける英語必修、大學入試に於ける會話能力測定の導入などあり。古き佳き時代の達人を知る實務家、研究者はこれらに首を傾ぐるも、一般市民の輿論は壓倒的に贊成と云々。

地球一極主義は前記の如くオリソピック、地球温暖化、傳染病等の問題に世界中が協力する事に大いなる力を發揮する意味に於て極めて有用なる事言ふまでもなしと雖も、過度の均一化を求めなば、必ず破綻すべし。然るに前世紀末地球一極主義の限界が論議せらるゝ中、我が國に於ては所謂構造改革として、國語改革のみならず、日本の家庭内教育や勞使慣行の廢止など、米國一流大學に留學せる若き俊秀達の成果として提案實施せられたるを如何せむ。

我が國文化の歴史には、外來文化に對する多様性主張の傳統あり。古來大陸より多くの文物導入するも、律令制度の採用にては必ずしも漢土の刑罰を選択せず、文字の導入には

漢字假名交り文への獨立、佛教傳來には神佛習合など、「和魂漢才」を貴しとし、明治維新の歐化政策の下にも「和魂洋才」を貫きけり。今日地球一極主義の影響下次第に「洋魂洋才」に傾くも、幸ひ電網技術の革新的發展あり。今こそ「需要のある所、技術開發あり」を宗に國語を中心とする電網技術を開發する「和魂電才」に徹すべき時なれ。

(令和二年一月二十七日受附)